

5. 大学院・看護学研究科

5.1 理念・目標

5.1.1 博士前期課程（修士）

5.1.1.1 教育理念

「人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する」という本学の教育理念を受け継ぎ、深化・発展させる。看護を取り巻く状況が高度化・複雑化・専門化する中であって、より質の高い効果的な看護を構築・提供するために、学際的で深い科学的知識と高度の研究能力を有して看護学教育・研究・実践に携わることのできる教育者・研究者・高度専門職業人を育成し、看護学の一層の確立と看護実践の発展に努める。

5.1.1.2 教育目標

1. 看護教育を支える教育・研究職の育成

本課程では、学部で蓄積された看護学に関する成果を、さらに深化・発展させることによって時代と地域の要請に応えるため、看護学分野における学術上の先端的役割を担うとともに、知識の体系化と看護技術の開発を積極的に推進し、看護学の学問体系の構築に貢献する教育・研究職の人材を育成する。

2. 高度な専門的知識・技術・実践能力を備えた看護職者の育成

実践現場において当面する種々の問題について、体系的、継続的に研究を行い、合理的に問題解決できる人材や、看護職に対する指導・相談、関係する職種間の総合的調整能力、ケアの環境条件を積極的に改革していく役割を担う人材の養成が求められている。そうした要請に応えるため、専門看護師（CNS:Certified Nurse Specialist）の養成を図り、もって地域の看護の発展に一層寄与する高度専門職業人を育成する。

3. 女性の一生を通じた性と生殖に関わる健康を推進できる助産師の育成

時代の流れや社会情勢に高い関心と洞察力を持ち、多様化する女性の生き方や家族のニーズ、専門化・複雑化する助産に対応できる人材や、保健・医療・福祉に携わる多職種と積極的に連携・協働し、継続的に援助を推進できる人材の養成が求められている。そうした要請に応える助産師の養成を図るとともに、助産学の発展に寄与する専門職業人を育成する。

4. 生涯にわたって研鑽できる看護職の知的交流の場づくり

日々進歩・発展する医療技術と看護環境の変化に機敏に対応し、看護の知識と技術の向上を図るため、看護の実践現場と教育・研究の場の交流を活発にし、地域が要望する質の高い看護サービスの提供を図っていく。そのためには、学部の社会人入学に加えて、卒業後の継続教育、社会人の再教育の場を提供する必要がある。本課程は、このような向上心旺盛な学部卒業生や社会人の受け皿としての機能を持ち、看護現場のより一層の質の向上のために寄与することを目指す。

5.1.1.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

本学の看護学研究科では、入学者選抜試験を実施し、以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を幅広く求めています。

1. 幅広い基礎学力を有し、かつ希望する専攻分野の基礎知識を有する人
2. 人間や社会に対して広く興味を持ち、豊かな人間性と高い倫理観を有する人
3. 看護学を通じて地域社会及び国際社会に貢献する意志を有する人
4. 専門看護師コース志望者は、対応する分野の実務経験を有し、専門看護師の資格取得を志す人
5. 助産実践コース志願者は、助産師の免許取得を志す人

5.1.1.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

博士前期課程では、より卓越した看護実践能力と高い研究能力を有し、看護学の研究や教育、看護実践・管理に携わることのできる研究者・教育者・高度看護実践者を育成する。研究コースに加え、専門看護師コースと助産実践コースを設け、次のような教育課程を編成している。

1. 広い視野で看護を学ぶための学際的な科目から構成されている「共通科目A」、科学的根拠に基づいた高度な看護実践能力を育成するための「共通科目B」、各研究教育分野におけるより深い専門性を学ぶ「看護専門科目」を置いている。
2. 国際的な視野を持ち、より効果的な看護を探究し提供していくために、海外の招聘教員による国際看護を学ぶ科目を置いている。
3. 論文作成にあたっては、研究計画の中間報告や複数教員による、組織的で計画的な研究指導体制をとっている。
4. 専門看護師コースでは、特定分野におけるケアとキュアを融合した看護実践力、保健医療福祉チーム内の調整力などの育成をめざし、看護実践力の高い専門看護師とタイアップして日本看護系大学協議会で認定された専門看護師教育を展開している。
5. 助産実践コースでは、助産師免許取得に必要な科目のみならず、多職種と連携してハイリスクに対応でき、多様な年代の性と生殖に関わる健康課題に応えられる専門的知識・技術や倫理的態度を育成する科目を置いている。

5.1.1.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

所定の単位を修得し、次のような研究能力や看護実践能力を有する者に修士（看護学）の学位を授与する。

1. 看護学に寄与する修士論文の作成を通して、学際的で深い科学的知識を基にした体系的な研究方法を修得している。
2. 専門看護師コースでは、1に加えて特定の看護分野における高度な知識と技術を修得している。さらに、総合的な判断力をもって組織的に問題解決をはかる能力を身につけている。
3. 助産実践コースでは、1に加えて専門化・複雑化する助産分野に対応できる助産実践能力と助産管理の基盤となる能力を修得している。さらに、女性のライフサイクル全般の性と生殖に関わる健康課題に応える能力を身につけている。

5.1.2 博士後期課程（博士）

5.1.2.1 教育理念

「人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する」という本学の教育理念を受け継ぎ、深化・発展させる。看護を取り巻く状況が高度化・複雑化・専門化する中であって、より質の高い効果的な看護を構築・提供するために、学際的で深い科学的知識と高度の研究能力を有して看護学教育・研究・実践に携わることのできる教育者・研究者・高度専門職業人を育成し、看護学の一層の確立と看護実践の発展に努める。

5.1.2.2 教育目標

1. 看護学や看護実践の発展に寄与する教育者・研究者の育成

看護・保健・医療・福祉を取り巻く環境の変化や地域の要請に対応することができる高度で専門的な知識・技術と、総合的判断力、リーダーシップを備えた看護職を養成する。また、これまで蓄積された経験知や実践知に基づいてより効果的な看護ケアプログラムを開発していくとともに、健康に関する人々の反応や看護援助にまつわる専門的知識を系統的に理解し、諸科学の知見と関わらせながら看護学をさらに体系化し、かつ現代社会の変化や趨勢に照らして看護が果たすべき役割を發展的、科学的、体系的かつ原理的に探求していくことができる教育者・研究者を育成する。

2. 科学的な理解に基づいて看護をデザインできる研究者の育成

地域社会並びにそこで生活するあらゆる健康レベルの人々やその家族に対して総合的なヘルスケアをデザインするために、高度な理論・方法など学際的な知識体系を修得・活用して新しい看護実践方法、環境、用具等の開発を行なう。さらに、それらの実践の場における有用性の検証を図り、実践に活かせるエビデンスを明らかにできる研究者を育成する。

3. 対象の特性を踏まえた看護を実践できる研究者の育成

効果的な看護ケアプログラムの開発、あるいは対象者個々の個別性を踏まえ、その人たちが帰属する地域の文化的特性を踏まえた看護援助の開発、エビデンスに基づいた看護援助法の確立をめざした高度の研究を継続的に推進していくことのできる研究者を育成する。

5.1.2.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

入学者選抜試験を実施し、以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を幅広く求めています。

1. 実務経験を有し、看護学への探求心を有する人
2. 看護学研究に対する高い動機と学びに必要な基礎的研究能力を身に付け、自立して学修する姿勢を有する人
3. 看護学や看護実践の発展に寄与する意志を有する人
4. 看護学を通じて地域社会及び国際社会に貢献する意志を有する人

5.1.2.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

博士後期課程では、看護学や看護実践の発展に寄与する研究者・教育者を育成するために、教育課程においては次のような点を重視している。

1. 広い視野で看護学の学的基盤を見据え、看護実践のもととなる原理を解明する能力や人々の健康ニーズに役立てる能力を身につけるために、研究計画の中間報告や複数教員による組織的、かつ計画的な研究指導体制をとっている。
2. 学位論文の審査にあたっては、他の大学院等の教員を審査委員に加える等、論文の質の向上と客観性の確保に努める。

5.1.2.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

所定の単位を修得し、看護学や看護実践の発展に向け、学位論文において新しい知見を産出し、自立した研究活動に必要な能力を有する者に博士（看護学）の学位を授与する。

5.2 大学院生の入学・在学・修了の状況

1. 入学の状況

1) 入学定員・収容定員

| 課 程 | 単位 (人) | |
|--------|--------|------|
| | 入学定員 | 収容定員 |
| 博士前期課程 | 15 | 25 |
| 博士後期課程 | 3 | 9 |

2) 試験実施日

| | 実施日 |
|-------------------------|-----------------|
| 博士前期課程入学試験 (学内選抜) | 令和元年 7月 6日 (土) |
| 博士前期課程入学試験 | 令和元年 9月28日 (土) |
| 博士前期課程入学試験 (第2次募集) 応募なし | 令和 2年 1月25日 (土) |
| 博士後期課程入学試験 | 令和元年 9月28日 (土) |

3) 受験状況等

| 課 程 | 単位 (人、倍) | | | | | | | |
|----------|----------|------|------|------|------|------|------|-------|
| | 募集定員 | 志願者数 | 志願倍率 | 受験者数 | 受験倍率 | 合格者数 | 実質倍率 | 入学者数 |
| | A | B | B/A | C | C/A | D | C/D | |
| 博士前期課程 | 10 | 10 | 1.0 | 10 | 1.0 | 10 | 1 | 10(9) |
| 博士前期課程助産 | 5 | 3 | 0.6 | 3 | 0.6 | 3 | 1 | 3(3) |
| 博士後期課程 | 3 | 5 | 1.7 | 4 | 1.3 | 3 | 1.3 | 3(2) |

() の数字は内数であり女性の数を示す
博士前期課程には学内選抜を含む

2. 在学の状況 (令和2年3月1日現在)

| 課 程 | 単位 (人) | | | |
|--------|--------|--------|--------|--|
| | 1年次 | 2年次 | 計 | |
| 博士前期課程 | 13(13) | 15(14) | 28(27) | |

| 課 程 | 1年次 | 2年次 | 3年次 | 計 |
|-----|--------|------|------|------|
| | 博士後期課程 | 4(4) | 2(2) | 8(8) |

() の数字は内数であり女性の数を示す

3. 修了の状況

1) 修了者数と修了後の進路状況（令和2年3月31日現在）

単位（人）

| 課 程 | 修了者数 | 修了後の進路 |
|-------------|--------|-----------|
| 博士前期課程第15期生 | 10(10) | 医療機関、教育機関 |
| 博士後期課程第12期生 | 2(2) | 教育機関 |

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

2) 修了後の進路状況（令和2年3月31日現在）

(1) 博士前期課程（第15期生）

単位（人）

| 区 分 | 県内 | 県外 | 合計 |
|-------------|----|----|--------|
| | 人数 | 人数 | 人数 |
| 就 職 医 療 機 関 | 5 | 3 | 8(8) |
| 研 究 機 関 | 0 | 0 | 0(0) |
| 教 育 機 関 | 1 | 0 | 1(1) |
| 保 健・福 祉 機 関 | 0 | 1 | 1(1) |
| 合 計 | 6 | 4 | 10(10) |

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

単位（人）

| 区 分 | 県内 | 県外 | 合計 |
|---------------|----|----|------|
| | 人数 | 人数 | 人数 |
| 進 学 大学院博士後期課程 | 0 | 0 | 0(0) |
| そ の 他 | 0 | 0 | 0(0) |
| 合 計 | 0 | 0 | 0(0) |

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

(2) 博士後期課程（第12期生）

単位（人）

| 区 分 | 県内 | 県外 | 合計 |
|-------------|----|----|------|
| | 人数 | 人数 | 人数 |
| 就 職 医 療 機 関 | 0 | 0 | 0(0) |
| 研 究 機 関 | 0 | 0 | 0(0) |
| 教 育 機 関 | 1 | 1 | 2(2) |
| 保 健・福 祉 機 関 | 0 | 0 | 0(0) |
| 未 定 | 0 | 0 | 0(0) |
| 合 計 | 1 | 1 | 2(2) |

（ ）の数字は内数であり女性の数を示す

5.3 大学院教務学生委員会

委員長：川島 和代 教授

委員：長谷川教授、亀田教授、紺家教授、林教授

事務局：田島教務学生課長、松本専門員

活動内容：

1. 委員会の開催について

大学院教務ならびに院生の学生生活に関する以下の事項について審議・実施し、必要事項は研究科委員会で審議・報告し、大学院運営を行った。

- 1) 年度初めに新入ならびに在學生へのガイダンスを実施した。
- 2) 助産実践コースの大学院生には、助産学担当教員が別枠のオリエンテーションを企画した。時間割・授業がうまく運用できるかモニタリングしながら委員会をすすめた。
- 3) 助産実践コースの大学院生が初めて修士論文審査ならびに論文発表会が実施できるよう論文提出の締め切り、審査期間を前倒しして実施できるよう計画し、助産師国家試験に専念できる期間を確保した。
- 4) 既修得単位、14条学生、長期履修生、科目等履修生、休学・復学の申請書類の確認を行い、研究科委員会への審議実施の準備を行った。
- 5) 前期・後期成績判定、学位授与・修了判定を行った。
- 6) 非常勤講師、院内講義担当者、実習施設から提出された臨床教授に関する申請を受けて検討した。
- 7) 時間割の作成、大学院便覧2020の作成を実施した。
- 8) 在學生との懇談会や修了生へのアンケートを実施し院生の満足度を明らかにし、修学支援を検討した。さらにダイプロマポリシーに沿って学修状況の評価に努めた。

2. 修士論文・博士論文に関する検討・審議について

1) 中間評価委員、予備審査・本審査委員の案の検討

平成31年度（令和元年度）の博士前期課程の修士論文（12件：2019年4月実施）の中間評価委員と論文審査委員（15件）（案）、博士後期課程の博士論文（1件：2019年11月実施）の予備審査委員（案）を研究科委員会に提出した。

2) 中間報告会（前期・後期）、修論・博論発表会の運営

4月に修士中間報告会（12名発表、参加者77名）、7月に博士後期課程の中間報告会（1名発表、参加者55名）を実施した。

3) 修士論文・博士論文発表会の運営

2月に修士論文発表会（15名発表、参加者78名、うち内部76名、外部2名）を実施し、研究科委員会にて可否の判定を行った。引き続き、博士後期課程の院生1名が博士論文を発表した（参加者69名、うち内部69名）。研究科委員会にて審議の結果、修了・学位授与が承認された。

3. 助産看護学分野の開設2年目の運営について

- 1) 助産看護学分野開設2年目（完成年度）を迎え、院生の入学後の学習環境整備（実習室、

院生室)を行った。さらに、研究コースやCNSコースの学生との間で授業の進行や履修状況に差異が生じないか継続的にモニタリングを行った。

- 2) 修士論文作成や審査体制などスケジュールに関して検討し、研究科委員会にて審議依頼を行い、研究コースやCNSコースの院生よりもひと月前倒しで修論審査を実施、円滑な運営に努めた。助産学コース5名の第1期生は、予定通り修了することができた。

4. 大学院生の学修環境の改善について

- 1) 7月に委員2名が『大学院生との懇談会』をもった。院生からの要望をとりまとめ研究科委員会で報告を行った。また、プリンターの補充と書籍の購入(研究科長預り金)を行った。
- 2) 院生室の蛍光灯が暗い、デスクが場所によって照度に差異があるとのことであり、照度測定を行った。修士論文作成時期に院生室が冷えるとの要望があり、昨年引き続き暖房器具を貸与した。

5. 大学院教育懇談会の開催について

大学院の受験生確保および実習場所拡大、修了生の動向把握を目的に、昨年につき8回目の「大学院教育懇談会(旧陸3県看護部長懇談会)」を実施し、19名の看護部長等、本学教員22名の参加を得て、意見交換をした。

6. 学部生の大学院進学に関する支援について

- 1) 2月に学部3年次学生向けの大学院説明会を開催した。助産学のみならず、健康科学領域や実践看護学領域の分野紹介も行った。大学院への進学を相談に来た学生も見られた。
- 2) 大学院の修士論文・博士論文の発表会に学部生の参加も促し、ポスターの掲示・配布を実施し3名の参加が得られた。

5.4 2019年度 修士論文題目一覧

| 分野 | 氏名 | 修士論文題目 | 指導教授 |
|------------|-------|---|-------|
| 助産看護学 | 沖田 聡子 | 小学校高学年女子児童への月経教育に関する母親の認識 －月経教育支援のあり方に視点をあてて－ | 濱 耕子 |
| 助産看護学 | 新谷里沙子 | 妊娠期における立ち会い出産に対する夫の認識 | 濱 耕子 |
| 助産看護学 | 木村紗也夏 | 不妊症予防における男女大学生のプレコンセプションヘルスに関する研究 －男性不妊症と予防行動への関心に焦点をあてて－ | 亀田 幸枝 |
| 助産看護学 | 中村 佳穂 | 産後1か月における混合栄養で授乳を行う母親の納得と関連要因の検討 | 亀田 幸枝 |
| 助産看護学 | 川之上莉央 | 救急搬送された妊産婦受け入れ時における安心につながるケアの実態および看護師の自己評価との関連要因 | 亀田 幸枝 |
| 看護デザイン | 三輪 早苗 | 心的時間測定の咀嚼・嚥下機能への応用 | 小林 宏光 |
| 地域・精神・保健学 | 渡辺 達也 | 加齢による視機能の変化の実態把握～40歳代に焦点をあてて～ | 石垣 和子 |
| 老年看護学 | 元女喜久乃 | 地域在住高齢者にかかわる介護支援専門員の栄養アセスメントとケアプラン作成の実態 | 川島 和代 |
| 老年看護学 | 松田 知恵 | 睡眠に障害のある認知症高齢者の入院中の睡眠パターンと光環境の可視化 | 川島 和代 |
| 看護管理学 | 北川奈美江 | 2年目看護師が新人看護師と看護ケアを協働した経験 | 丸岡 直子 |
| 看護管理学 | 北川 智 | 病院に勤務する副看護師長が看護師長と協働関係を構築するプロセス | 丸岡 直子 |
| 子どもと家族の看護学 | 中田 史世 | 看護職に対する「子ども虐待防止をめざす支援者育成プログラム:気になる親子に‘気づく・関わる・つなぐ’力を発揮するために」の効果 | 西村真実子 |
| 成人看護学 | 濱鍛治青水 | 終末期がん看護実践で抱いたネガティブな感情への対処と気づき | 牧野 智恵 |
| 老年看護学 | 古嶋 涼子 | 高齢患者の地域包括ケア病棟転棟に対する捉え方と転棟直後の体験 | 川島 和代 |
| 老年看護学 | 津田 裕子 | 介護老人保健施設における看護師のポリファーマシー改善への介入 | 川島 和代 |

5.5 2019年度 博士論文題目一覧

| 氏 名 | 学 位 論 文 論 題 目 | 指 導 教 授 |
|-------|-------------------------------------|---------|
| 橋本 智江 | 介護保険施設における入浴ケア援助者の温熱環境からみたケア実施方法の検討 | 川島 和代 |